

Q₁₀ 豊臣秀吉が 浜松で働いていた?

A 若き秀吉の就職先が浜松でした。

尾張からやって来た無名時代の豊臣秀吉(当時、日吉丸)が浜松の武家に拾われ働き始めたのが16歳の時。奉公先は今川家の家臣で引間城の城主飯尾豊前守の配下「松下家」。1551(天文20)年、秀吉が主人に連れられ、引間城で猿まねを披露し城主の家族を喜ばせたと「太閤素生記」に記されています。秀吉が浜松にいたのは18歳まで。その後、1570(元亀元)年、家康公が引間城に入り、ここで寝起きしながら戦い、城を拡張して浜松城とします。家康公と秀吉の接点、引間城は現在の元城町東照宮。秀吉の奉公先「松下家」は南区の頭陀寺町に遺跡が残っています。



松下屋敷跡近くの頭陀寺町天白神社境内には秀吉が鎌を研いだと伝えられる池も残る。

※徳川家康公顕彰四百年記念事業で平成27年9月から松下屋敷跡一部発掘調査。(P5マップ参照)

A 多勢に無勢、武田信玄の巧みな戦術に大敗北。

甲府から遠州に入ってきたライバルの武田信玄は、家康公のいる浜松城を攻めることなく兵を西に向けました。家康公は、これが信玄の挑発と知りつつも、自分の領土を荒らされたことに黙っていることができず、意地を通し出陣しました。多勢に無勢、ベテラン信玄の戦術の前に大敗北。しかし、この家康公の挑戦は、地元の人々の心をつかみました。その後の戦術にも反省が生かされ、家康公は、真の強さを手に入れていきます。この「三方ヶ原の戦い」の情景は緻密なジオラマ作品として再現されています。(P6マップ参照)

(ジオラマ展示場所)
2015(平成27)年7月27日(月)から10月25日(日)まで浜松城天守門、11月1日(日)から(特別展「徳川家康天下取りへの道」)浜松市博物館

Q₉

なぜ家康公は、三方ヶ原の戦いで
負けたの?

Q₁₁ 三方ヶ原の戦いが 映画化 されていた?

A 1943(昭和18)年公開の映画の1シーンになっています。
日本映画「生きてゐる孫六」は、浜松出身の映画監督、木下恵介による作品。製作当時の戦時下での古い風習に振り回される人間の滑稽さを描いています。冒頭に、大がかりなロケによる三方ヶ原の戦いの再現シーンが登場します。木下監督は黒澤明らと共に戦後の日本映画界の黄金期を築きました。浜松を代表する出世人のひとりです。 問い合わせ先 木下恵介記念館 ☎457-3450

Q₇ なぜ、苦渋の顔の 家康公を復元したの?

A 家康公の浜松時代を象徴するものだから。
「立体しかみ像」は家康公が生涯、自らの戒めのために座右から離さなかったといわれる肖像画「しかみ像」を等身大の立体で再現したもの。三方ヶ原の戦いに敗れ、浜松城に逃げ帰った家康公の苦渋に満ち、疲れ果てた表情を文化財複製の専門家が細部にわたって再現しました。家康公31歳、不屈の精神を学んだ浜松時代を象徴するこの姿こそ「やらまいか」の原点ともいえるのではないのでしょうか。



徳川美術館に所蔵されている家康公浜松時代唯一の肖像画をもとに復元。完成度を高めるため裸の状態から制作して衣装を着せた。身長159cmで設定。

〈展示場所〉2015(平成27)年7月27日(月)から10月25日(日)まで浜松城天守門、11月1日(日)から(特別展「徳川家康天下取りへの道」)浜松市博物館

Q₆

家康公を
たたえる日は
ありませんか?

A あります。10月「出世の街浜松家康公祭り」。

山梨県に「信玄公祭り」があるように、浜松に家康公をたたえる日があっても不思議ではありませんでした。それならばと、2014(平成26)年10月にスタートしたのが「出世の街浜松家康公祭り」。家康公の偉業を称賛するため、浜松時代の家康公の人となりや勇姿を表すエピソードを歴史から掘り起こし、分かりやすく伝承するものです。

Q₈



信州軍が連勝を続ければ、6万5千年後に遠州灘まで到達。

市内山中で
いまだに
合戦が
行われている?

A 県境で綱引き合戦が行われています。
武田信玄が、県境・ヒョー越峠を通り、家康公との三方ヶ原合戦に挑んだことにちなんで行われる長野県飯田市との合同イベント「峠の国盗り綱引き合戦」。1987(昭和62)年から続いています。遠州軍は浜松市天竜区水窪町、信州軍は飯田市南信濃から両市の商工会青年部が対戦し、勝った方が県境を1メートル相手方に移動できるというルール。毎年10月の第4日曜日に開催。平成26年現在信州軍が2m進軍中。(P5マップ参照)